

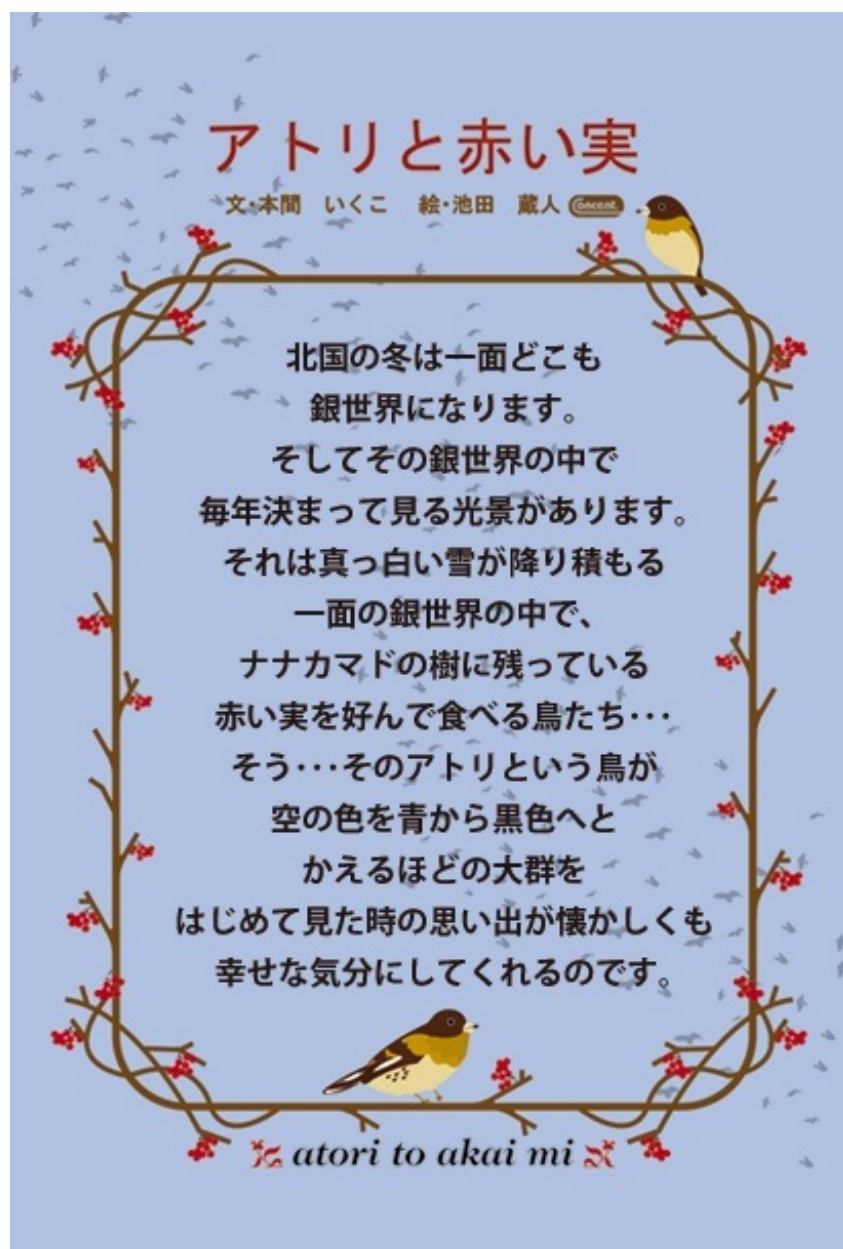
Oncent
© WARP SCOP

アトリと 赤い実

atori to akai mi



文・本間 いくこ 絵・池田 蔵人 Oncent





「あれ？お母さんは？」

「おじいちゃん家にもっていくお土産を買いに行ったよ…」

それを聞いた私はいつも

「お兄ちゃんはいいなあ～」とつい言ってしまいます。

それは、三年生の冬休みからお兄ちゃんは

一人で汽車に乗って、

おじいちゃんとおばあちゃんの家

遊びに行くようになったからです。



私はそれがあんまりうらやましいものだから、
もう一度「お兄ちゃんはいいな〜」と
ランドセルを背負ったまま片付けをしている
お兄ちゃんのそばに
ペタンと座り込んでしまいました。



それに気がついたお兄ちゃんは
「ん・・・」と私に声をかけます。
私は「私も行きたいなあー」と
声を出して言ってしまいます。
すると、私の声が大きかったのか、
お兄ちゃんは初めて私にも
「一緒に行くか？」とってくれたのです。

「ほんとう！ほんとうにいいのお兄ちゃん！」

「うん、いいよ！だけど！

父さんと母さんが許してくれるかなあー、
それに…お前、夜になっても泣いたりしないか？
母さんはすぐには来てくれないんだぞ…
それからおじいちゃんとおばあちゃんの部屋で
みんなで寝る事になるんだぞ。お前大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫、お兄ちゃんが一緒だもの。」
私は手のひらを合わせて拝むように答えます。

するとお兄ちゃんが

「よし！わかった！俺が母さんに言ってやるから…」
そういつてくれたのです。



しばらくしてお母さんが
お土産を買って戻って来ました。
お兄ちゃんは私が一緒に旅行に行けるように
一生懸命頼んでくれています。

「兄ちゃんは慣れているから
心配はないけど、
あの子はねえ。どうしようかしら、
迷惑をかけても申し訳ないしねえ。」
と困っているお母さん。

結局、夕食が済んでからおじいちゃん
おばあちゃんに
電話をかけて頼んでみることにしました。



「あの子が行きたいと言いだしたの？いいかしら…」

長々と話しをしているのが聞こえてきます。

その様子を見ている私とお兄ちゃんは

じっと顔を見合わせて待つばかりです。

そしてようやく電話が終わるとお母さんが

「おじいちゃんとおばあちゃんが
二人で仲良く気をつけておいでよ、
待っているからね…だって…」

「やったー！」

私はもう嬉しくて嬉しくて

部屋の中を

スキップでもするかのように

踊り回りました。





みんなで駅に行き、私とお兄ちゃんは
一目散に列車に飛び乗ります。
窓の向こうからはその姿を不安そうに眺めるお母さん。
駅のチャイムがなり、お母さんは
「行ってらっしゃい」と心配そうに声をかけます。
しかし二人は
「いってきまあーす！」
と元気な声で答えるのでした。











しばらく歩いておじいちゃんの前に着いた時のことです。

「じいちゃん、今年も真っ赤なナナカマドの実がたくさんついたね。」

「そうだよ、赤くてきれいだろう。写真機、持ってきたかい？」

「うん、ここにあるよ、ほらっ」





次の日の朝、何やら表から大きな声が聞こえてきます。

「おい、おい」と

大きな声で呼んでいるのはおじいちゃんです。

それを聞いたお兄ちゃんは

「今、いくよ！」…と写真機を手に急いで、
おじいちゃんの声のする方に走っていきます。



そして走りながら、「ほら、お前もこっちにおいで。
少し寒いけれど向こうを見ていてごらん。
もうじき、あの大きなナナカマドの樹に沢山の小鳥がきて、
赤い実をアッという間に全部食べて、
また飛んで行ってしまおうんだよ。」

するとどこからか


「キョツ、キョツ」と小鳥の鳴く声が聞こえてきます。

その小鳥の泣き声は「キョツ、キョツ、キョツ」と

ダンダンだんだん大きくなり、

空を見上げると十羽、五十羽、百羽、もっともっといます。

それはもう沢山の小鳥の大群です。



よく見ると、その小鳥は顔が黒っぽくて
背中が赤くて、お腹が白い本当にきれいな可愛い小鳥なのです。
小鳥たちはバサッ、バサッと音を立ててナナカマドの樹に止まり、
赤い実を食べ始めます。樹の枝が今にも折れそうに揺れています。

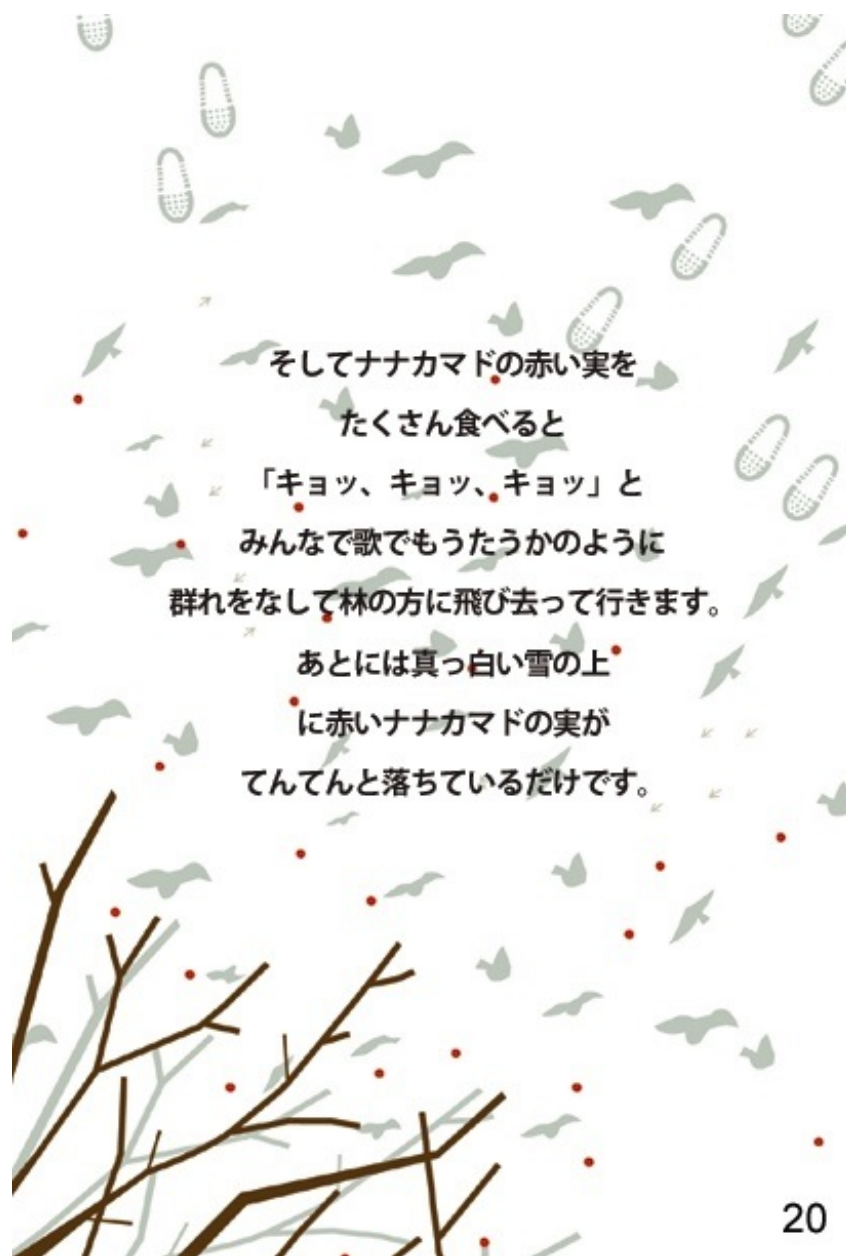


私は小鳥たちが「キョッ、美味しいよ。」
「キョッ、ごちそうさま」と言っているように聞こえました。

私がじっとその様子を眺めているとおばあちゃんが
「あの鳥はね、アトリという名前だよ」と教えてくれます。
「冬になるといつもここにみんなで遊びにくるんだよ…」
とおじいちゃんも教えてくれます。



アトリたちは
ナナカマドの実を一粒、
一粒しっかり口に入れて
とてもおいしそうに食べています。
私は「どのくらい美味しいのかなあー
一度にあんなに沢山食べて
お腹こわさないのかなあー」
ちょっぴり気になりました。



そしてナナカマドの赤い実を
たくさん食べると
「キョツ、キョツ、キョツ」と
みんなで歌でもうたうかのように
群れをなして林の方に飛び去って行きます。
あとには真っ白い雪の上
に赤いナナカマドの実が
てんとんと落ちているだけです。



私は飛び出して、
ナナカマドの赤い実をひとつ拾うと、
そっとかじってみました。
「うわあー、にがい！」私は赤い実があまりにもにがいので
びっくりしてしまいます。



横ではお兄ちゃんが
「はははは」と写真機を持って笑っています。
「お兄ちゃん、いい写真撮れた？」と私が声をかけると
「うん、実はね、初めて一人で遊びに来るようになったときから
ずっと写真に撮ってるいるんだ」と
私に教えてくれました。

「へえ～」と私が返事をするとお兄ちゃんは
「こうやって、写真に撮っていくといい思い出になるんだ。
毎年、少しずつ大きくなっているアトリ達もいるんだよ」
「へえ～思い出か～」

「そうだ！お前も来年から一緒に写真を撮るか？」

「うん！写真を撮る！」

「よし！来年も一緒におじいちゃんとおばあちゃんちにこよう！」

「うん」私は元気良く返事をする
何だかとてもうれしくなって、
帰ったらお父さんとお母さんにアトリが沢山来たことや、
来年の冬休みもお兄ちゃんと一緒に
たくさんのアトリの写真を撮りに来る事を
話してあげようと決めたのです。



それから11年後、

おじいちゃんとおばあちゃんの家に向かう
列車の窓からの景色は何も変わっていません。

私が最初にお兄ちゃんと初めて2人で旅をした時のように
一面きれいな銀世界が広がっています。

ただ一つ違うのは、

忙しく働いているお兄ちゃんに代わって
今は私がアトリと赤い実を写真に撮っていることです。

首から下げているこの写真機は
お兄ちゃんが使っていたのを
そのままもらい、
修理をしながら大事に
使い続けています。

そして、今度はもう一台
カメラを買って、
私とお兄ちゃん
アトリと赤い実を撮りに
来ようと思っています。





あとがき

このお話は雪の降る北国の小さな町を舞台に、
どこにでもいるような小さなきょうだいを
モチーフに書いています。

大人になるとすれ違いが多く、
気持ちを素直に伝えることが難しくなりますよね。
でもみんな小さなころは今よりももっとちっぽけなことに
感動出来たり、喜んだり、怒ったりしたはずです。

そして一人一人の中に

このお話のような小さな物語を
持っているのではないのでしょうか。

(本人が気づいていないだけで・・・)

あなたも大切な人に素直に気持ちを伝えられるといいですね。
この本を手にして下さったすべての方に感謝致します。



本間いくこ
札幌市西区在住
いずみ書道会代表 書家

池田蔵人
コンセントデザイナー
「ヘイ!ヘイ!シュルーム」
北海道日刊スポーツ新聞社
北海道ポータフォン携帯サイト
などのキャラクターデザインを担当



コンセント HP アドレス <http://www.warpscoop.co.jp/concent/>